

2. 教員のための解説書

解説の内容

1. どうして子どもなのに虐待について学ぶのですか
2. こんなのも虐待ですか
3. 虐待されて育つとどんな影響がありますか
4. どうして自分の子を虐待するのだろう
5. 虐待されていると気づいたらどうするのだろう
6. 虐待しない大人になるためには

なぜ子ども虐待を学生が取り上げるのかについてですが、子ども虐待の問題は、多くの学生にとって、自分のこととして捉えにくい面があります。そのため、このテーマに先立ち、DVDを教材にして、感想を述べ合うということも一つのアプローチになります。

今回の調査では、虐待しない（間違った子育てをしない）親になるためにどういうことを知っておきたいですかという点について自由回答を寄せてもらいましたが、多種多様な回答がありました。虐待について学びたい、子どもに接することや学びたいというニーズがたくさん書かれてありました。そういったことに答えるためにも、丁寧な形で生徒（学生）たちにフィードバックしていくことが重要となります。

時間がない場合には、あらかじめ教員が内容をつかんでおき、例えばパンフレットを手に取りながら、言葉を説明していくことになります。

また、調査を通して、あらたに相談したくなった学生(生徒)がいたら、すみやかに保健室と連携をしたいものです。

“子ども虐待”について学ぼうとしている皆さんに

はじめに

子ども虐待は、特別な家庭にだけ起きる、特別な事と思われてきましたが、子育て環境が大きく変わり、子育てに難しさを感じる今の時代では、子ども虐待は、どの家庭でも起こりうる親子の関係と考えられるようになってきました。ですから、子どもを育てている親も、育ててもらっている子どもも、今は子育てと関係のない世代も、誰もが、子ども虐待に無関心であってはいけないのです。

誰もが虐待について正しく学ぶことができれば、誰もが虐待に早く気づき、誰もが虐待を早く遠ざけ、誰もが虐待から早く回復されるのです。

子ども虐待について学ぶことは、誰もが一人の人間として尊重され、自分らしく生きていく権利を持っていることを学び、自分の持っている力に気づいていく学習と言えるでしょう。

Q 1. 子どもなのにどうして児童虐待について学ぶのですか？

A① 皆さんが虐待について知るのには、新聞やテレビで報道される、子どもの命に関わるような事件を通してのことが多いでしょう。皆さんは、そうした、悲惨な、目を覆いたくなるような事件性の高いものだけが“虐待”と思っていないでしょうか？それは違います。

“子ども虐待”とは、子どもの健やかな成長を妨げるような不適切な行為の全てを言います。

痛ましい事件が起きた時、「もっと早く虐待に気づいていたら。」とよく言われますが、この「早く虐待に気づく」ことこそ、虐待が痛ましい事件にまで至らないために、最も大切なことなのです。皆さんが虐待について正しく学ぶことは、“早く虐待に気づく力”を育み、虐待から自分や家族、友人を守る力を獲得することになるのです。

A② 新聞やテレビで報道される虐待事件を皆さんはどんな気持ちで見たでしょうか。

ほとんどの人が自分とは関係のない事として聞き流したでしょうが、それでもなお、心の奥に大人に対する不信感や、恐怖感が残ったのではないのでしょうか。

「自分の子どもなのに、なんでそんなことをするんだろう？」とか、「人間はそんな酷いことをするものなのか？」とか。そうした漠然とした不安に覆われると、身近な大人や親に対して抱いていた信頼感や、尊敬の気持ちが揺さぶられてしまうこともあります。

私たちの心は、自分とは関係のないところで起こった事件でも知らず知らずのうちに影響を受け、不安や緊張を高めているのです。虐待について正しく学ぶことは、そうした漠然とした不安に立ち向かい、人と人との間にしっかりと信頼関係を築いていく力を育てます。

Q II. こんなのも虐待ですか？

Q① しつけだと言って、できない時はいつも叩かれるのは？

A① 子どもは、親から受ける叱責や、体罰は自分がいけないことをしてしまったから受けるしつけなのだと思込みがちです。親だから、時には、感情的になり、遠慮のない言動になってしまうことがあるかもしれませんが、そんな対応がいつも繰り返されるとしたら、それは、親が子どもの成長を願って叱るしつけとは違います。しつけは子どもの成長や幸せを願って、親が子どもに教えてくれる“社会で生きていくための力”であるはずです。子どもの心や体を傷つけるような教え方は決してしつけとは言えません。子どもは未成熟だから、親の庇護を受けなければ生きていけません、育ててもらっているからと言って、親の言いなりにならなければならない訳ではありません。子どもも一人の人間として生きる権利を持っていますし、一人の人間として尊重されるべき存在なのです。

子どもが言うことをきかなかった時の本当のしつけは、どうして出来なかったのかを尋ね、一緒にできる方法を考えてあげることではないでしょうか。

Q② 子どもの方が悪いことをした時に叩かれるのは？

A② 子どもが約束を守らなかったり、何度言っても親の言うことを聞かなかったりした時、親はどんな気持ちになると思いますか？

親の言うことを聞かない子がこの先どうなるのか心配で、不安でたまらなくなり、その不安をぶつける親もあるでしょうし、親の言うことを聞かない子に腹が立ち、もっと強い親としての力を見せ付けようとする親もあるでしょう。どちらも、親だからこそ抱く気持ちですが、その結果、子どもに暴言を浴びせたり、脅迫めいた言動をしたり、暴力を振るったりすることを、「子どもが悪いことをしたんだから仕方がない、子どもを思うからこそしてるんだ。」と言って、全て許していいのでしょうか。

「子どもの頃 1 回だけ親に叩かれたことがあった。あれがあったから横道にそれなかった。」と言う人と、「いつも叩かれていたから、叩かれるのが当たり前とっていた。」と言う人がいます。親に叩かれた思い出の受け止め方がこのように大きく異なるのは、子どもに、親の気持ちが届いていたかどうかにあるのではないのでしょうか。

叩かれる恐怖だけが残るような親の対応は虐待というしかありません。

Q③ 叩いたりしないけど、毎日のように「生むんじゃなかった」とか「嫌い」とか言われるのは？

A③ 自分の親からこんなふうに行われると、自分は生まれてきてはいけなかったのかと、自分の存在を恨めしく思ったり、自分らしく生きていく気力を失ってしまいそうになります。虐待と言うと、暴力で痛めつけられたり、食事を与えられなかったりのような事態のことだけをいうのだと思われがちですが、虐待とは子どもの成長を歪める不適切な行為の全てをいいます。ですから、こうした子どもの心を傷つけ、心の育ちに大きな影響を及ぼす行為も虐待です。

どうして親は子どもにそんな酷いことを言うのでしょうか？言われた子どもは自分に原因があるような気がして「自分が居ない方が」とか「自分が悪いから」と、自分を責めるのですが、原因は子どもではないのです。親を取り巻く環境に何か本当の原因があるのに、そこには立ち向かっていけない時、子どもという一番弱い立場に、自分の気持ちをぶつけているのです。

子どもは悪くないのです。自分を責めないでいいのです。自分を大切にしていればいいのです。

Q④ 叩かないけど、親の言うようにしないと睨んだり、子どもの大切なものを捨てたりするのは？

A④ 親からこうした行為を受けると、戸惑ってしまいます。もっと真正面から怒ってくれる方が、子どもの方も言いたいことが言えるから、打開策も見えてくるのですが、こうした無言の一方的な押し付けは、子どもの気持ちを一切シャットアウトしている訳で、親との関係も築いていきにくくなります。

親の方からのこうした対応は子どもにとってとても不安で、いつも親の顔色を見るような対応になりがちですが、これもまた、子どもが原因ではありません。親の側に子どもとは関係のない、何か納得のいかない問題があって、ストレスが高くなり、子どもとの向き合い方に歪みが出ているのです。“子どもに非はない、親自身の問題だ”と理解し、自分自身を責めたりしないことが大切です。

Q⑤ 親と一緒に風呂に入るのは？

A⑤ 幼い頃、家族みんなでお風呂に入るのは普通のことだったでしょう。でも、成長と共に、「一人で入りたいな」と思うようになるのは、子どもから大人へと成長していく時に歩む当然の道のりです。お風呂に入ると誰でも無防備になりますから、そんな自分を家族といえども見られたくないと思うのは当たり前のことです。「親子なんだから、何が恥ずかしいの？」とか、「一緒に入る方がエコだから」と、親が気楽に言ってきたとしても、自分の意志を通していいのです。自分の体は最も個人的なプライベートゾーンですから、自分が守るのです。風呂に家族と入るかどうかは子ども自身が決める大切なことです。

Q⑥ 親が朝起きられないので、下のきょうだいが遅刻したり、休んだりしているのは？

A⑥ 親の体調が悪いとか、仕事で疲れているからといって、朝、子どもの登園や登校に無関心なのは、親としての責任を果たしていないことになります。子どもに、決った時間

に起き、服装を整え、朝ごはんを食べて学校に行くという、子どもの成長にとって基本的な生活習慣を身に付けさせることは、親の大切な役割です。いろいろな事情でそれが困難であれば、他人の協力や社会的な支援に助けを借りることもできるのですから、子どもの登園、登校を保障する努力をしないままほっておくのは虐待になります。

QⅢ. 虐待されて育つとどんな影響がありますか？

Q① 親にひどい事を言われたり、叩かれたりしていたのに誰にも言わないのは何故ですか？

A① 親から酷い仕打ちを受けていても、子どもは、それが虐待だとはなかなか気づきません。多くの子どもたちが、悪いのは自分、自分が言うことを聞かなかったから怒られていると思っています。だから、誰かに相談しても「あなたが言うことを聞かないから叩かれるんでしょ！」と言われるだけだと思っていますのです。

また、言ったら親に怒られると思う子、自分が親に虐待されてるわけがないと必死で思い込もうとする子、自分が虐待されていることは誰にも知られたくないと、秘密にする子もあるでしょう。それぞれに色々な理由があると思いますが、その中でも一番気がかりなのは、親から虐待されていると気づいていても、多くの子が、親を守ろうとして誰にも言わないでいることです。

虐待について相談することは、決して、親の悪口を告げ口することではありません。親の大変さに気づいてあげることにもなるのです。虐待について学ぶことで、虐待から守られねばならないのは子どもだけではなく、親も救うことになるんだということを知ってください。

Q② 自信が持てず、いつも引っ込み思案なのは怒られて育ったことと関係がありますか？

A② 子どもの頃、怒られて育ち、その頃は虐待とは気づかずにいたけど、成長するにつれて、「あれは虐待だったのでは？だから、今、こんな……」と気になることがあります。特に、叩くとか、蹴飛ばすとかいった乱暴な怒り方ではなく、言葉で傷つけるような怒り方や、怒鳴られも叩かれもしなかったけど、いつも無視される、そんな親の対応は虐待とは気づきにくいのです。でも、心にはしっかりと記憶されていて、性格形成に影響することがあります。言葉の暴力（怒鳴られたり、否定されたり、非難されたり）や、存在を無視するような対応を受けて育つと、自分らしさを尊重する気持ちが育ちにくく、充分力を持っているのに、自信を持って行動できなかったり、いくら頑張っても何か足りないような気がして不安だったり、ということがあります。

自分の努力や、頑張りを振り返って、自分を認めてやりましょう。

Q③ すぐ感情的になり、人間関係がうまくいかないのは虐待を受けた事と関係がありますか？

A③ 子どもは人間関係を、最初は親から学びます。親がするように、親にされるようにすることがいいことだと思うからです。気が短く、すぐ感情的に怒る親だったり、子どもの気持ちなんか聞く耳持たないような親だったりすると、子どもは怖くて自分の気持ちを伝えたり、整理したりする経験を積み上げていくことができません。親との関係で、お互いを尊重しあった向き合い方を学ばないまま成長すると、人と人との関係が不慣れで、多様な付き合い方が難しく、臨機応変に切り替えられず、ちょっとした行き違いで感情が変化し、理性を失なってしまうがちになるのです。

でも、人との出会いを大切に、様々な人との接触を積み重ねていくうちに、親からの影響から少しずつ脱け出し、自分らしい付き合い方が見つかるでしょう。

Q④ 親のことを悪く言うのは親を裏切っていることになりませんか？

A④ 多くの子どもたちがそう思っています。それだけ、子どもにとって親は絶対的な人であり、どんな目にあっても親に愛されたいと、どの子も思っているということです。そして、親の方も、どんなに酷い叱り方をしていたとしても、自分の子には幸せになってもらいたいと思っているのも確かなことです。分かっていないのは、子どもを育てるのが大変になったり、苦しくなったときに、社会に助けを求めてもいいのだというルールです。子どもは親にとって大切な存在であると同時に、社会にとっても大切な存在です。親が苦しいとき、親が混乱しているとき、親が危険な行為をするとき、子どもが助けを求めることは、子どもを守るもう一人の責任者（社会）に力を借りることで、決して親を裏切ることにはなりません。むしろ、子育てを少しの間、社会に任せ、少し離れて暮らす期間があれば、親の方も気持ちや生活を立て直す余裕ができ、親にとっても有意義なことなのです。

虐待を防ぐには親からの相談と同じぐらい、子どもからの相談が大切なのです。

Q⑤ 虐待されて育つと自分も虐待する親になりやすいのですか？

A⑤ こうした考え方は“子どもは学び、成長し、変わっていく存在である”ことに気づいていない人が言うことです。子どもは、親の育て方に影響受けるのは確かですが、それは親と同じようになるということではありません。成長と共に親以外の色々な人と出会い、新たな影響を受けますし、色々な本や情報から、たくさんの事を学び、自分に及ぼした親からの負の影響を取り除き、成長していくことができるのです。

今、虐待について正しく学ぶことは、こうした間違っただけの考えに振り回されないためにも、とても大切なことなのです。

Q⑥ 子どもの頃の虐待を親に謝ってもらえますか？

A⑥ 子どもの頃に受けた親からの虐待が忘れられず、大人になっても心身ともに不安定になっている人は、相当数居られます。だからこそ、虐待はそうなる前に、もっと早く気付くことがとても大事なのです。親にとっても、子どもにとっても、早く気付けば、その傷は浅く、回復も早いのです。子どもの頃であれば、親が素直に謝れば、子どもも親

に謝ってもらうことで、自分は悪くなかったと確認できて、自分を嫌いになることもないでしょう。これが、大人になってからだと、「何を今ごろ言い出すの?」と、親も子どもにも素直に謝れない人が多く、却って関係が悪くなることもあるようです。親子の関係修復は早いほど、得るものは多いと思います。

QIV. どうして自分の子を虐待するのだろう？

Q① 親は子どもを生むとき、子どもを本当に生みたくて生むのですか？

A① 「虐待するぐらいならなんで生むんだろう」と思いますね。でも、子どもを生む選択をした親は、色々な困難があつたとしても、子どもの誕生を楽しみに待っています。人間の赤ちゃんは十月十日もお母さんのお腹の中で大切に守られて育つのです。その間、母親はお腹の中の赤ちゃんとずっと一緒です。でも、こんなに長い間お腹の中で育てても、生まれてくるのは未熟な、一人では何もできない赤ちゃんです。その小さな、小さな命を育てていくことは、親にとって何にも代えられない喜びですが、残念ながら子育ては、何もかもが未知の世界、未知の体験なんです。親は、どうしたらいいか分からない、上手いかわない、そんな失敗を繰り返しながら、周囲の人に教えられたり、助けってもらったりしながら、親として成長していくのです。

でも、この大変さを色々な事情で乗り越えられない時、自分の子どもと初めて対面した時のあの感動を、残念ながら、忘れてしまうことがあるのです。

Q② 親は子どもより自分の方が大事と思うのですか？

A② 日頃の親の行動を見ていると、自分の都合や、言い分ばかりを押し通し、子供の気持ちなんか考えてないように見えるかもしれません。でも、親は皆、自分の子どもの幸せを願っています。

色々な事情で親の幸せと子どもの幸せが重ならない事態が起きた時、以前は、子どもの幸せを優先して自分の幸せを諦める親の方が多かったように思います。特に、母親は「子どもが大事」と自分の幸せを犠牲にしたようです。しかし、本当にそれでよかったのでしょうか？

子どもの側から考えてみると、親が自分の為に何かを諦めていると知ったとき、自分を大切に思ってくれている親の気持ちに触れ、嬉しい気持ちになるでしょうが、同時に、何か大きな荷物を背負わされたような気持ちにならないでしょうか？

親は子どもを大切に思う気持ちと同じくらい、自分も大切にしたいのです。その両方を大事にしていれば、親も子も余裕をもった向き合い方ができるのではないのでしょうか。

Q③ 親になれば誰でも子どもは育てられるのですか？

A③ 子どもを生むと親と呼ばれるようになり、親としての役目を担うことになりますが、

親になったら、自然に親らしい気持ちが湧き出して、子育てができるようになる訳ではありません。しかし、夫婦で助け合い、色々と学び、周囲の人に教えてもらったり、助けてもらったり、そして、何よりも、子どもを大切に思う気持ちがあれば、誰にでも子どもは育てられます。子育ては昔から、親から子へ、人から人へ、社会から社会へと伝承してきた人類の営みです。一人で抱え込むものではありません。人と人とのつながりに支えられた子育てこそ、私たちが目指す子育てです。

Q④ 親は、どの子も同じようにかわいがらないといけないのでは？

A④ 確かに、親の態度に疑問を持つ事がありますね。2回目、3回目と出産を経験することで母親も父親も不安や、緊張から幾分解放され、子どもの誕生への気構えや準備も特別な事ではなくなり、落ち着いた日常生活の中で着々と進めることとなります。そうした、出産の時の親の気持ちが子育てにも微妙に影響することがあり、上の子にはいつまでも心配が消えなかったり、下の子には、何の根拠もないけど、大丈夫と決め付けて、やや、乱暴な接し方をしていたり、男女の違いで接し方が大きく違うこともあります。こうした接し方の違いは、子どもから見たら明らかに差別しているように見えるけど、親の方は気づいていないなんて事もあるようです。親は、どの子も同じように大事と思っても、接し方が違ってしまふことを認め、時には、自分の子育てを振り返って見なければいけませんね。

Q⑤ 父親は仕事をしているから子育てはしなくていいのですか？

A⑤ 家族が暮らすためには家計を担ってくれる人が必要です。父親が仕事をするのはそのためですが、最近は母親も働いている人は多く、家計を支える担い手になっています。ですから、父親は外で働いて家の中のことは母親がするという役割分担は崩れていっています。その上、核家族化が進み、子育てを身近なところで見守ってくれたり、助けてくれたりする人を持たずに子育てをする家族が増えていますから、父親の子育て参加は子育て家族にとって絶対必要となっているのが現実です。

父親の子育て参加は、母親の気持ちを安定させ、子どもには、母親とは違う接し方を体験させる、とても意味のあることなのです。子育てに積極的に参加する気構えを、子どもの生まれる前から、夫婦で考えておいて欲しいものです。

Q V. 虐待されてると気づいたらどうするのだろう

A⑤ 虐待について勉強すると親の子育てを厳しく見直したり、子どもの頃虐待されてたかも？とか、今も虐待されているかも？といった疑問や、不信感が湧いてくるかもしれません。でも、それは親を初めて客観的に見る目が育ち始めているということです。親と言う大きな存在から少し離れて、自分の考え、自分の判断が出来るための第一歩

です。

子ども虐待をなくすには、そうした子どもの側から見た感じ方や、判断がとても重要です。親が虐待した、しないではなく、子どもにとっての虐待とは何か？を考えなければ、虐待を本当の意味で防ぐことは出来ません。

子どもの側からの疑問や、訴え、相談や、意見が求められています。

子ども虐待防止の相談窓口にご相談してください。相談することは力です。相談する力を持つことが虐待をなくし、虐待の被害から子どもを守ります。

QVI. 虐待しない大人になるには？

A⑥ ここまで学んだだけでも、皆さんには子どもの虐待に正しく向き合う姿勢が育ってきたと思います。これからどんな人生を生きていくのか、その全てが、子どもを虐待しない大人になる方向に繋がっていくために、今の自分に、次のようなことを問いかけてみてください。

①自分を大切にしているかどうか？（自尊感情）

②困ったときに、誰かに愚痴ったり、相談したりしているかどうか？（多様な人間関係）

③相手の気持ちを考えて、話をきちんと聞いているかどうか？（他者理解）

④生活面での自立度（身の自立）を高めているかどうか？

⑤経済的自立に向けて、職業選択を考えているかどうか？

どうでしたか？どれも特別なことではありません。幸せに生きていくために誰もが心がけることなのですが、時に、おろそかにしてしまいそうなことも混じっています。

どうか、忘れないで、自分に問い続けてみてください。

QVII. おわりに

虐待について学んでみてどうでしたか？見方が変わったとか、ちょっと気になることがあったとか、色々考えるきっかけになったのではないのでしょうか。

尋ねたいこと、もっと知りたいことなど、皆さんからの声を待っています。

子どもが、子どもの時間を安全でのびのびと暮らせる社会を作るために、力を寄せ合っていきましょう。

3. 学園祭などでオレンジリボン運動を実施する方法

●学園祭にてオレンジリボンを配布する場合の例

第1段階 学園祭までにしておく準備

1. 子ども虐待について学ぶ
2. オレンジリボンについても説明できるように学ぶ
3. オレンジリボン運動として、どのような活動をするのかを考える

例 オレンジリボンを作成

- ・あらかじめオレンジリボンを作成するのか
- ・学園祭で、参加者にリボンを作成してもらうのかを考える
- ・参加者がリボン作成の場合には、リボンが作成できるようにリボンサイズ、ピン、オレンジリボンの準備を当日までに揃える

第2段階 学園祭企画内容の決定

1. 野外（ブース）での活動か
2. 教室展示企画か
3. 教室展示企画の一部としての活動か

第3段階 内容の決定（オレンジリボン配布の場合）

1. 配布方法を決定する
 - ・野外の場合
 - ・教室展示の場合
2. オレンジリボン配布と他の企画をどう関係づけるのか

第4段階 学園祭までの準備（オレンジリボン配布の場合）

1. ボードにオレンジリボン運動の意味をメッセージとして作成する
2. リボン作成の配布担当者を決定する
 - ・野外であれば、どういう形で担当者を決めるのか
 - ・教室展示企画であれば、どのような形で配布するか
 - *当日参加者とリボンを作成する場合には、展示室にコーナーを設ける
 - *展示室でリボンを配布する場合、説明書をつけ、あるいは説明ができるようにしておく。

第5段階 学園祭当日の準備と活動内容（オレンジリボン配布の場合）

1. 展示室の一角にオレンジリボンの作成コーナーを設けて、担当者1名が責任をもつ
2. 展示室の一角にオレンジリボンのボードを作成し、すでに作成したオレンジリボンを渡す
3. 子どもや大人が来て、遊びながら、子どもと家族の福祉を考える
(例：おりがみコーナー、塗り絵コーナー、紙芝居コーナー さらに、その一角にオレンジリボン運動を提示しておく)

4. まとめ

若者への啓発事業について、児童虐待への認識調査、市・府県・政令都市への啓発調査及び啓発事業を実施した場合の反応結果と3つの調査を学生、研究助手とともに実践した。

「子ども虐待とは何か」を学ぶことは、人間として「生きる」「育つ」こととは何かを考える機会を与えてくれることにつながる。また、今後、子ども虐待の発生を予防・防止をするためには、若者が子ども虐待への正しい知識を持つことや、困っている時に相談できることに慣れておくことが重要だと考える。調査協力いただいた大学、高校生及び協力いただいた関係者、自治体にお礼を申し上げたい。調査にあたっては、児童虐待防止全国ネットワーク（オレンジリボン）理事長吉田恒雄先生、小笠原貞子氏（児童虐待防止協会）、山本廣子氏（児童虐待防止協会）、勤務校商学部教授に助言を頂戴した。感謝したい。（文中では、児童虐待、子ども虐待の区別なく利用している。児童虐待は法定であるが、近年は子ども虐待を利用するケースが多いので併用した。お断りしたい。）

（監修・文責 加藤曜子）

今回調査にあたって検討した資料抜粋

本・調査報告

高橋重宏 他「子どもへの不適切な関わり（マルトリートメント）のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究（2）（3）日本総合愛育研究所紀要 第32集・第33集

江戸川子どもオンブズ 「子どもに聞く虐待防止アンケート調査報告書」2010年

子ども虐待防止学会 熊本大会要旨集

鈴木祐子・木村恭子・刀根洋子・及川裕子：子ども虐待の認識（2001）日本赤十字武蔵野短期大学

玉井邦夫『学校現場で役立つ子ども虐待対応の手引き 子どもと親への対応から専門機関との連携まで』明石書店.2007年

岡本正子・二井仁美・森実『教員のための子ども虐待理解と対応』生活書院.2009年

10代の親の虐待事例 新聞記事

ブックレット・DVD

子ども虐待防止センター 「私が出会った子どもたち—小さな星たちの記録」坂井聖二著 CCAP ブックス

児童虐待防止協会 「叩きだしたら止まらない」ブックレット

岩手県 子育て支援ブックレット

神奈川県 わが子に手をあげたくなるとき

DVD 泉南市市民劇、滋賀県作成、「誰も知らない」、「ジュノ」

シェイクン・ベイビー・シンドロームに関する資料・パンフレット

流通科学大学・加藤研究室 「ワタシはここにいるよ」2003年中学生用虐待防止ブックレット

オレンジリボン・ホームページ

パンフレットなどを送付いただいた自治体

和歌山県、高知県、伊賀市、茨木市、吹田市、宝塚市、姫路市、明石市、川西市、伊丹市、大和郡山市、田辺市、倉敷市、周南市、松山市、大分市、日田市、鹿児島市